仕事が楽しい人Ｆｉｌｅ．１３：中村達也さん（自治会副会長）

◆自治会（町内会）活動とは
皆さんは、自治会（町内会）がどのような組織で、何をしているのかという詳細をご存知でしょうか。私は、お恥ずかしながら、まったく認識がありませんでした。
そこで、今回は仕事が楽しい人として、川崎市高津区新作第五自治会副会長の中村さんを取材させていただきました。

まず基礎知識として、町内会をウィキペディアで調べてみましょう。

町内会は、日本の集落又は都市の一部分（町）において、その住民等によって組織される親睦、共通の利益の促進、地域自治のための任意団体・地縁団体とその集会・会合である。
また、その管轄地域のことを指す事もある。
呼び方も、町会、町内会、自治会、区会、地域振興会など、様々である。
とウィキペディアに記載されています。
何だか、よくわかりませんね。

そこで、中村さんには、自治会の組織の構成を教えていただくことから始めました。
会長、副会長、会計部、総務部、広報部、防犯防災部、文化体育部、厚生部、環境衛生部、こども会、さつきクラブ会（婦人会）、睦クラブ会（老人会）などがあり、役員は総勢で７０名程度となっているようです。
自治会費は、月間１５０円から４００円で、一人暮らし世帯、マンション家族世帯、戸建家族世帯により、会費が区分されています。
新作第五自治会の加入率は、おおよそ６０％から７０％。１１００世帯が会費を収めています。

役員は、地域住民からの口コミ紹介により専任され、無報酬（ボランティア）で仕事をしています。

中村さんは定年退職された後に、お住まいになっているマンションの理事長になったのをきっかけとして、自治会の役員会に参加するようになりました。
それまでは、中村さんも自治会がどんな組織で、何をしているのかは知らなかったそうです。役員会に参加してすぐに、中村さんは廃棄物減量指導員を務めるよう依頼されました。
廃棄物減量指導員の仕事は、ルール通りに分別していないゴミの分別をし直したり、分別を啓蒙するポスターを掲示したりする、地味なものです。
その他にも、地域の防災訓練、盆踊りや秋祭りのやぐら組み、町内パトロール、会員の勧誘など、地域を安全に明るくするための、地道な役割を務めています。

中村さんは１９８０年にマンションを購入し、それから今日までの３２年間、川崎市高津区新作に住んでいますが、自治会の役員になった２００６年から、サラリーマン時代とは異なった感覚で、新作で生活をされているそうです。
それは、地域内で挨拶をし合う知人が増えたことで、毎日が楽しくなったというのです。
定年前は仕事に追われ、朝は急ぎ足で駅に向かい、夜は仕事と接待に疲れて家路につくことの繰り返しで、道で人と挨拶を交わすことはほとんどありませんでした。

今は、一歩外に出れば、近隣の人と自然に挨拶をし合い、時には立ち話をする。この何気ない接触が、心地いいのだそうです。
また、このような地域の人との触れ合いが、犯罪の発生を防ぐとも中村さんは断言します。
それは、街で見かけない顔の人が歩いているのを見かけると、近隣の人と
「スーツ姿でメガネをかけている人を最近見かけるけど、どちらの人なんだろうね」
「私も、ちょっと気になっていたんだけど、この街に住んでいる人ではないみたいだね」
というような会話をするそうです。
こういう場合には、見かけない顔の人に、「おはようございます」「こんにちは」と、挨拶を積極的に行います。
そうすると、怪しい人は、自ずと街から姿を消してしまいます。
この事例を教えていただき、ニューヨークの犯罪率を激減させた、“割れ窓理論”を思い出しました。
疾しいことを考えている人からすると、色々な人から挨拶をされれば、自分の顔を覚えられているようで、居心地が悪くなるのでしょう。

挨拶が犯罪防止に役立つと半分納得しかけたところで、中村さんに、
「ところで、怪しい人って、そんなに簡単にわかるんですか？」

と、素朴な疑問を投げかけました。すると、中村さんは、
「わかりますよ！」
「だって、街を行き来するのは、地域の人に加えて、郵便屋さんや宅急便の配送員、宅配や新聞配達の人たちで、ほぼ決まっています。毎日挨拶をしていれば、だいたい顔も覚えてしまいます」
「だから、見知らぬ人って、簡単にわかるもんなんですよ」
と、当然ですと言わんばかりに答えてくれました。
納得です。

◆中村さんが大切にするキーワード
優しさ、思いやり
優しさや思いやりは、全ての人が持っている心であり、
優しく接すれば、この心の扉が開き、優しさが返ってくると信じています。

◆中村さんのパワー〇〇
朝食
朝ごはんを美味しく食べられるのは健康のあかしで、気分が明るくなります。

◆平堀が中村さんから学んだ地域活動の大切さと難しさ
中村さんからお話を伺い、自助、共助、公助の中でも、特に共助について見直す必要性があると痛感しました。

自助：自分の責任で、自分自身が行うこと
共助：自分だけでは解決や行うことが困難なことについて、周囲や地域が協力して行うこと
公助：個人や周囲、地域あるいは民間の力では解決できないことについて、公共（公的機関）が行うこと

我々は、３．１１の震災で、自助と公助の限界を、目の当たりにしました。
自分でできることにも、公共機関にできることにも限りがあります。
“遠い親戚よりも近くの他人” と言われるように、いざという時の頼りは、近隣に住む地域の人たちです。ですから、今、地域の結びつきの重要性が再認識され、あり方が見直されているわけです。

中村さんは、言っていました。
「定年前に会社に勤めているときには、地域は、ただ単に自宅がある場所でした」

「でも今、私にとっての新作は、仲間にあふれた場所に変わりました」
「だから、新作に住んでいるのが楽しくてしょうがないんですよ」と。
私は、この話を聞いて、羨ましいなと思いました。
そして、懐かしいなとも感じました。

私の幼少時代は、近所のおばさんと挨拶もしましたし、雷オヤジにどやされもしていたからです。まさに、映画の“ＡＬＬ　ＷＡＹＳ　三丁目の夕日”に出てくる情景が、日常でした。
この映画が大ヒットしていることからも、多くの人たちが、私と同じように、昭和の良き時代を懐かしみ、現代に求めています。
ところが、地域の結びつきを強めるのは、簡単ではありません。
自治会の加入率が６０％から７０％であるとの実情が、それを物語っています。
自治会の活動の下支えの恩恵を、誰もが受けているにもかかわらず、加入しない方が３０％から４０％も存在する。
私は、「月々数百円の会費を、なぜ払おうとしないのか」と正義感を燃やし、この感情を中村さんにぶつけましたが、中村さんは、まったく違った捉え方をしていました。

中村さんは、義務感の押しつけで加入を強要する考えは、まったく持っていませんでした。
「平堀さん、自分の地域に新たに転居してくる人がいると、なんだか嬉しいんですよね」
「どんな方が引っ越してくるのかな」
「お子さんはいるのかな？歳はいくつくらいかな？」
「何て考えを巡らし、役員同士で話をするんですよ」
「こんな思いを胸にして、自治会加入のお誘いをしています」
「入る、入らないはその人の自由ですから、あまり加入率にはこだわっていません」
そして、中村さんは、次のように結びました。
「企業に勤めているときには、役職とか実績を盾にして、人を半強制的に動かせました」
「けど、地域住民は、これまでの役職も実績も関係なく、みんなが対等です」
「対等な関係の下で、お互いが協力し合う」
「この協力を引き出せるのは、人望しかありません」
「ですから、協力していただけないのは、自分に人望がないということになります」
「そして、協力していただけるのは、協力する方の人望に甘えるということです」
私は、この話を聞き、心の中で「参りました」と呟きました。
みなさんも、この機会に自分の住んでいる自治会（町内会）活動を、見直してみてください。

◆自治会（町内会）員に求められる能力
朗らかさ：心にわだかまりがなく、晴れ晴れとして明るい
素直さ：ありのままで、飾り気がない
謙虚さ：控えめで、つつましい
※自治会員に求められる能力は、中村さんに定義していただきました。